

「あなたがたがしなさい」

(マルコ 6:30-44)

2020年3月29日礎キリスト教会説教要旨

今お読みいただきました場面は、5千人の給食として知られている、有名な場面です。無に等しいものを祝福して、多くのものに恵みを与えてくださるキリストの姿が描かれています。しかし、こんなに祝福をすることのできるお方を前にしていながら、弟子たちはそのことにまったく目が開かれていなくて、彼らの考えられる範囲のことをイエス様に押し付けます。神に指図する人間の、愚かで罪深い姿です。

私たちの祈りも、どこかこれとそっくりではないでしょうか。「神様、ああしてこうしてそうなれば、いいのです。ですからどうぞ、ああしてこうして、そうしてください」と。問題の解決の仕方まで、人間が神に指図をしてしまうという、何とも変な祈りをしてしまうことがあるのではないのでしょうか。それも、ここは辺鄙だとか、もう時刻は遅いなどと、否定的なところばかりに目を付けるという傾向が描かれていて、これまた自分自身の姿だなあとつくづくと思ってしまう。

そうしますとイエス様は、彼らに答えて言われました。「あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい。」とです。この時イエス様は弟子たちに、大変なチャレンジをされたということなのです。

これに対して弟子たちは、2百デナリ必要である、という計算をしてそんな無理難題をふっかけるような指示をされるイエス様は、何も状況がわかっていないのではないかと非難をするかのようなようでした。けれども実は、34節に「彼らが羊飼いのいない羊のようであるのを深くあわれみ、」とございますように、ここでの計算は、天国の計算が必要だったのです。天国の計算というのは、キリストがあわれんでいてくださる場面なのだ、という計算です。ですから、「あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい。」と言われたときに、「ではどうぞ、あなたが私たちをお用いくださって、あなたのあわれみをもって祝福を注いでください」と応じるべきだったのです。

そうしますとイエス様は彼らに言われました。「パンはどれぐらいありますか。行って見て来なさい。」「五つです。それと魚が二匹です。」実はちゃんと、私たちに与えられている資源が、備えられているということなのです。

そこでイエス様は、みなを、それぞれ組にして青草の上にはすわらせ、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて祝福を求め、パンを裂き、また二匹の魚も人々に配るように弟子たちに与えられました。「自分には出来ない。けれどもそんな無力な自分を差し出すと、神様が祝福して信じられない用いられ方をされるのだ。」これがメッセージです。どんなに辺鄙でも、どんなに遅くても、ほとんど何もなくても、けれどもキリストが祝福されると、こんなことが起こるのです。

41 節に「人々に配るように弟子たちに与えられました。」とございます。何もできないと言っていた弟子たちが、この時このキリストの祝福の分配者として、用いられていたのです。この礼拝での奉仕者すべても、この時の弟子たちと同じ立場でしょう。司会者も説教者も、その他すべての奉仕者も、天の祝福を分配するために用いられているだけです。何とも喜ばしい奉仕ではないでしょうか。「私は何もできません、何も持っていません」というのは謙遜でいいでしょう。しかし、「だから何もしません。何をしても無意味です。」という対応は、このような祝福をしてくださるキリストの前では、まったくふさわしくない対応になってしまうのです。それは結局、自分の力で何とかしようと思っているという、傲慢のなせる業なのです。謙遜とは、自分が無力であるということをわきまえつつも、しかし神様は力をもって恵みを注いでくださる方であると信じることなのです。

私たちの人生にこれからも、どれほどこういう場面が訪れることでしょうか。こういう場面というのは、だれかの必要が迫っているときに、どうしても自分が何かをしなければならぬ、という場面です。つまり 37 節のように、「あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい。」と言われるような状況です。そういうときに、無に等しい自分自身を、キリストに差し出すことです。「イエス様。今の私は、どう考えましても、あなたのご用には使い物にならないものです。けれどもそんな役立たずのものでしかございませんが、けれども主よ。どうかこんな者を祝福してお用ください」とです。つまりそういう状況で、歯を食いしばって頑張る、というのではないのです。イエス様の祝福を信じて、ご自分を差し出すことです。そうしたときにきっと、思ってもみなかったキリストの栄光の業が、目の前に出現するということが起きます。

イエス・キリストという救い主が、どんな小さなものでも用いてくださって、祝福してくださるのだという信仰によって、大胆に生きていきたいと思えます。そのように生きていって、いつも神の栄光をほめたたえる人生を闊歩していきたいと思えます。